

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 26 日現在

機関番号：33923

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520082

研究課題名（和文）農の思想と地域協同・共生に関する日中共同研究

研究課題名（英文）Japan-China Joint Research Project: Philosophy of Agriculture and Regional Collaboration/Coexistence

研究代表者

李彩華 (LI CAIHUA)

名古屋経済大学・経営学部・准教授

研究者番号：10310583

研究成果の概要（和文）：本研究は、現地調査、比較検討、日中共同研究会、学会発表等の研究方法によって、以下の諸点にわたる研究成果を得ることができた。(1) 梁漱溟と江渡狄嶺をめぐる日中の農の思想が交響しあう協働関係を史的に明らかにすることができた。(2) 農の実践をともなう梁漱溟と江渡狄嶺との独自の農の哲学には、混迷する現代の思想状況を克服するための指標となる可能性を秘めているということをいくつかの視点から検討できた。(3) 戦前期に主張された多彩な農の思想から、農業・農村・農民の社会に関する政治的・イデオロギー的といった歴史的制約を超越したより普遍性の高い理念や価値を析出することができた。(4) 梁漱溟と江渡狄嶺の農の思想および実践の根底にかかわる哲学的な問題を比較検討し、両者がともに農の実践を通して、より深いところで形而上学の根本を掴んでいたことを明確にした。

研究成果の概要（英文）：In performing this project, we used fieldworks and comparative analyses, and held joint meetings and conference discussions in both Japan and China. The conclusions of this project are as follows. (1) We could historically clarify that there were sympathies with philosophies of agriculture and cooperative relationships, between Liang Shuming in China and Tekirei Edo in Japan. (2) From several perspectives, we could show that the two thinkers, involving in agricultural practices, had potentialities to overcome chaotic modern ideological conditions, with their own philosophies. (3) From analyses of diverse thoughts of agriculture, which were advocated in the pre-war era, we could extract universal ideals and values, which transcended political and ideological restraints to farmers, agriculture and farming communities. (4) We could demonstrate that the two had their own metaphysical principles at a deeper level through practicing agriculture, by comparisons of their philosophies and practically basic problems.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：梁漱溟、鄉村建設理論、理性と理智、江渡狄嶺、家稷農乗学、戦前期「農の思想」、地域協同、地方自治、コミュニティデザイン、日中共同研究、現地調査

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

経済の発展にともなう農業の位置は相対的に低下する。さらに農業人口の流失により、村落共同体は解体し、家族組織は変質する。これまでの秩序感覚、価値観もその根拠を失う。このような状況のなかで、農業を擁護し、あるいは農業が持つ様々な意義、もしくはその価値を強調する論説、主張がおこなわれる。顧みれば、日本では明治・大正・昭和期において、実に様々な近代的な農の思想（農本思想）が生み出されていたのであった。それは、いずれも明治以降の急速な近代化・産業化によって重大化した農業と農村問題への対応という背景を持っていた。これらの農の思想のなかには、たんに旧秩序に対する感傷ではなく、混迷する現代の思想状況を克服するための指標となる可能性をもつものもあると考えられる。

もとより、急速な経済発展にともなう農業・農村の衰退は、日本でも高度経済成長期以降深刻な課題となっている。そのため、近年、農と地域を再考してその再生をめざす集落営農、地域学、有機農業、食農教育、「新農本主義」、環境思想の観点から農の思想の可能性を探求する研究の現れなどという様々な試みが見られ始めている（例えば、『シリーズ 地域の再生』全 21 巻、農文協、2009 年～；研究誌『環境思想・教育研究』1～4 号、東京農工大学環境思想・教育研究会；尾関周二・亀山純生等編『〈農〉と共生の思想—〈農〉の復権の哲学的探求—』、農林統計出版、2011 年参照）。

一方、GDP が世界第二位という高度な経済発展を遂げている中国も、日本と同じ轍を踏むようなかたちで、きわめて深刻な環境破壊と農業・農村問題を経験するようになった。1990 年代後半から顕在化した「農業の低生産性、農民の低所得、農村の荒廃」を意味する「三農」問題は、いまでも中国の経済社会の構造的矛盾の核心的位置にある問題だと指摘されている（黄祖輝「中国『三農』問題：評価と解決の道筋」農林水産政策研究所 2012 年 8 月参照）。そして近年、商工業地や住宅地に転用するために、農地が不正没収や強制収用されるといわれる「失地農民問題」も大きな社会問題としてクローズアッ

プされている（秦大忠「中国における『失地農民問題』解消に向けた株式合作制の導入過程とその効果—山東省済南市 Z 村の事例分析を中心に—」、『農業経済研究報告』37 巻、東北大学 2005 年；阿古智子『貧者を喰らう国 中国格差社会からの警告』、新潮社 2009 年参照）。

現在、中国の農村政策では、農業に対して資金投入とサポートを実施し、さらに農民の負担を軽減するなどの措置を取るようになった。これは、持続可能な発展という意味で、農業と農村の問題をこれ以上等閑視することはもはやできないという政治判断が働いたからであろう。

本研究は、現在にわたって急速な変貌衰退を進めている日本と、現在深刻な混乱状態にある中国とにおける農業擁護・尊重思想を、その提言が依拠している時代状況を含めて比較検討・共同研究することにより、その可能性を明確にしようとするものである。このような視点に立つとき、中国における梁漱溟の鄉村建設理論および日本の江渡狄嶺の「家稷農乗学（かしょくのうじょうがく）」をはじめとする近代化への反作用として主張された農の思想は、こうした現代的課題に一つの展望を投じうる豊かな思想的土壌であるといえることができる。梁漱溟と江渡狄嶺とは、ともに農の問題を根底にすえた実践を通して、きわめて独創的な境位を切り開いた農の哲人である。その根底には、伝統に根ざした農村の再生を方向づけるプランがある。また橘孝三郎、賀川豊彦、権藤成卿など、戦前期に主張されたその他の農の思想からも、農業・農村・農民の社会に関する、政治的・イデオロギー的といった歴史的制約を超越したより普遍性の高い理念や価値を析出できると思われる。

これまで、農の思想（農本思想）に関する先行研究は、時代の変遷にともなう一定のパターンを示しながら多様な視角から検討を積み重ねてきた（網澤満昭「農本主義研究の足跡と展望」『農本思想の現代的意義に関する研究』基盤研究（C）成果報告書、研究代表者・岩崎正弥、平成 23 年 3 月参照）。しかし同報告書の指摘からも若干窺えるように、これまでの先行研究では、史的な農の思想に対する現代的な観点からのアプローチ、ひいては現実状況に依拠

して農と地域を再考し、地域協同と共生をめざすための指標となる農の思想の可能性を解明することに重点をおいた研究は未だ少ないといわざるを得ない。

現在、農業と農村の問題は、日本や中国のみならず、東アジア全体にとっても、一様に深刻な課題であるといえる。近年、環境や生命といった今日的な問題をめぐる哲学的思想的な省察は、日本と中国の研究者の間で既に共通の課題となりつつある。例えば環境、生命、共生、またはグローバリゼーション、東洋と西洋の思想的協同といった問題について、日本哲学会と中国哲学界を代表する中国社会科学院哲学研究所は多大な労力を費やして、2006年頃からこれまで3回にわたって有意義な共同フォーラムを催してきた。それ故、農の思想について現代的な観点から共同研究を試みる必要性は、まさに農の問題をめぐる日本と中国、ひいてはアジアの共通性のうちにあるということができる。このように、農の思想の持つ可能性を発掘することに力点を置きつつ、東アジア社会の協同・共生のプランを展望する本研究は、こうした現状に対する共通認識が深まった結果として実施されるに至ったものである。

2. 研究の目的

21世紀は「環境の世紀」のみならず、実に「地域協同・共生の世紀」でもある。そのなかでも、とくに東アジア社会の協同と共生の道を探求することは、様々な領域から注目される喫緊の課題である。東アジア地域の協同・共生の道を模索するには、東アジアにおける「農」の思想伝統を顧みる必要がある。なぜなら、今世紀の環境の危機を乗り越える道も、また現在の経済危機を乗り越える道も、農業の振興、農村の再生にかかっているといえるからである。本研究は、農業の振興、農村の再生を導く日中の「農」の思想の復元力を明らかにすることを基本目的としてかかげるものである。

3. 研究の方法

本研究は、申請当初に計画していたとおり、①現地調査、比較検討、②共同研究会による文献資料の読解・分析・討議、③学会発表の方法によって進めてきた。

【2010年度】本研究は申請当初、中国の研究協力者とともに梁漱溟の農の思想と実践について中国で現地調査・資料収集を行う計画を当該年度に立てて

いた。だが、本課題が追加採択された時期は既に10月下旬となっていたため、現地調査を次年度に延期し、当該年度においては、江渡狄嶺など日本における農の思想を中心に資料収集・テキストクリティーク・共同討議を行うように予定変更した。

○代表者と分担者はそれぞれの所属大学を研究拠点に、文献の解読を行った。また東京杉並区にある狄嶺文庫で定期的に行われる狄嶺会例会にも時間の許す限り出席し、狄嶺の未刊行原稿「場の講義」のテキストクリティークおよび共同討議を行った。なお、分担者の木村は同例会の講師をも務めている。

○『農本思想の社会史』（京都大学学術出版社1997年）を執筆した愛知大学教授の岩崎正弥氏を招請し、「近代日本の「農業擁護思想」史上における江渡狄嶺」と題する話題提供をしてもらい、議論を重ねた（2011年2月）。

○代表者は名古屋哲学研究会日本思想史部会において、地域協同と共生の視点から狄嶺の「家稷農乗学」について口頭発表し、参加者の意見をうかがった（2011年2月）。また、中国の研究協力者牛建科氏（山東大学教授）を介して、中国の梁漱溟研究者である李善峰氏（山東省社会科学院教授）とメール交換を通じた交流・対話を重ねた。

【2011年度】当該年度から、岩崎正弥教授を分担者に加えることとなった。

○北京大学と中国社会科学院を訪問し、研究協力者王青氏（中国社会科学院研究員）を介して、中国の研究者たちと座談することができた。中国における梁漱溟研究の現状や生態農業の展開などについて議論を行った。この通訳は、王青氏および李彩華が務めた（2011年8月）。

○研究協力者の李善峰教授の協力により、かつて梁漱溟の「郷村建設運動」が行われた地である山東省鄒平県を訪問し、現地調査を実施することができた。梁漱溟記念館、資料館、さらに現在の鄒平県農村の変化、郷鎮企業の発展などについて考察をし、関係資料を入手した。梁漱溟関係資料の収集・保存に尽力している民間人の梁漱溟研究者の話をうかがうこともできた（2011年8月）。

○山東大学にて日中共同研究会を開催し、近代思想史における日中の農の思想と現代について、日本側は代表者と両分担者、中国側は李善峰教授が比較検

討の視点から口頭発表を行い、通訳を介して発表者同士、または参加者たちとで活発な議論を重ねた。この通訳は牛建科氏および李彩華が務めた（2011年8月）。

○日中共同研究会の延長として、代表者と分担者は愛知大学にて研究会を開き、各自が口頭報告すると共に共同研究の深化を図るための意見交換を行った（2012年1月）。

【2012年度】○代表者は中国の学会にて口頭発表を行い、協同・共生の観点から安藤昌益や狄嶺の農の思想の可能性について隣接領域の研究者に向けて発信した（2012年11月）。

○長崎総合科学大学にて行われた「農業と環境」の公開講演会では、岩崎が「農の思想環境・地域共生」と題する招待講演を行い、李が梁漱溟の「理性自治」の思想に関連付けたコメントを行った（2012年11月）。

○名古屋哲学研究会と本研究が共催したシンポジウムにおいて、木村と岩崎はそれぞれサステナビリティの視点から農の思想の可能性について外に向けて発信した。研究協力者の牛建科教授は同シンポジウムにて「宗教とサステナビリティ」と題する基調講演（招待講演）を行った。この通訳は李彩華が務めた（2013年2月）。

4. 研究成果

上記の研究方法によって得られた成果は、以下の諸点にまとめることができる。

(1) 梁漱溟と江渡狄嶺をめぐる日中の農の思想が交響しあう協働関係を史的に明らかにすることができた。

梁漱溟の「郷村建設理論」と「郷村建設運動」は、同時代の日本にも影響を与え、1931年「日本村治派同盟」が結成され、その後の農本主義運動の起点となった。相互扶助的な郷村自治を説く梁漱溟の思想を日本に紹介するにあたって、1930年代には評論家の室伏高信、1930年代から40年代にかけては、農本思想家の菅原兵治の果たした役割が大きい。菅原の場合、1930年代に中国の農の思想を考察する旅を敢行している。また、梁漱溟の側近であり、梁の「郷村建設理論」と「郷村建設運動」理解者で代言者でもある朱経古と密接な交流関係にあった。菅原と朱経古の相互訪問と密接な交流は、やがて朱経古の江

渡狄嶺訪問、「三蔦苑」農場の視察を実現する橋渡しの役割を果たすことになる。このようにして、梁漱溟と江渡狄嶺という東西の二大系統の農の思想が邂逅し、互いに響きあう関係性が築かれたのである。

一方、梁漱溟自身も日中戦争開始前の1936年頃に日本への訪問を実現し、日本各地の農村経済更生運動を考察するとともに、長谷川如是閑、室伏高信、橋本伝左衛門といった思想家や農学者との交流も果たした。

(2) 農の実践をともなう梁漱溟と江渡狄嶺との独創的な農の哲学には、混迷する現代の思想状況を克服するための指標となる可能性を秘めているということをいくつかの視点から検討できた。

その一つの視点として挙げられるのは、梁漱溟と江渡狄嶺に共通して認められる「自然に従う」と「自治的な生活」を重視する思想である。狄嶺はトルストイやクロポトキンの農本思想に影響を受けて帰農生活の道に入ったが、百姓生活の中で地から湧き出る「地涌（ちゆ）」の生命としての「自然」、百姓生活の内なる無条件の原理としての「自然」を発見した。狄嶺の「自然」は、安藤昌益のエコロジイ的な自然、親鸞の「自然法爾」の自然、カントの従うべき規範としての自然のエッセンスを受け継いでいる。自然の自律性に学び、自らの内発的な自然感覚と内発性を形成させてゆく。このような自然理解は「自治的な生活」態度の普遍的な価値基準となりうる。

梁漱溟は「地方自治」の組織づくりの価値規範として「理性」の重要性を強調している。「理性」とは西洋の〈理性〉と違い、自己の私欲を抑制し、他者との「情理」を重んじ、相互に尊重しあう自覚と自律の意味で用いられている。「地方自治」にとって「理性」の倫理精神の発達は重要である。農業活動が密接に接触している「自然界」のゆったりとした性情と自然の自律性は、「理性」の啓発にもっとも適している。このような価値観は今日の地域協同社会の創設にとっても重要であると考えられる。

(3) 橋孝三郎、賀川豊彦、権藤成卿など、戦前期に主張された農の思想から、農業・農村・農民の社会に関する、政治的・イデオロギー的といった歴史的制約を超越したより普遍性の高い理念や価値を析出することができた。

近代の農本思想（農本主義）は、かつてその特質が「反官的、反都市的、反大工業的、反中央集権的」と規定されていたように、しばしば日本ファシズムとの関連で扱われてきた観がある。しかし実際のところ、農本思想（農本主義）は、その展開された歴史的時期によってかなり多元的で異なる様相を呈している。また個々の農本主義者も、時代状況に応じてかなり複雑に絡み合った思想的要素を有しており、同一人物は幾つかの時代区分に跨っていることも多いのである。一口に農本思想（農本主義）といっても、一概に日本ファシズムとの関連を前提において理解するというのは、逆に問題を孕むといわざるを得ない。

本研究では、たとえば、戦前期「農の思想」からのメッセージとして、「循環の回復」を根幹においた橘孝三郎の「永続農法」の「農村学」、さらに賀川豊彦の多様性確保の「立体農業論」が検討され、それらの思想の底流をなしているものには、いつの時代にも通用する「農と環境と地域共生」の知恵があることを明らかにしている。循環性と多様性を説く彼らの農の思想は、「内を豊かにする」という農の可能性を明確にするものとして読み取ることができる。

さらに、昭和前期の「社稷」という概念の意義も地域の生存および自治の視点から再検討された。そこで昭和前期の「社稷」概念は、「政治、経済、精神」における自治という「日本を超えた普遍的な概念」に近い特徴、「生成原理を土台とする地域形成」の自治という「かなり特殊日本的な固有性をもつ」特徴、産業化・都市化の進行によって生じた「地域間関係の歪み」を背景に、この概念に込められた「庶民の苦しみ、社会の矛盾に対する解放への期待」という特徴を持つものとして捉え直され、その具体的な構想、即ちコミュニティデザインを示すものとして、権藤成卿の社稷自治経済論や江渡狄嶺の家稷公共経済論が考察された。そして、今日の地域共生とサステナビリティに向けてのコミュニティデザインのあり方を展望するものとして、生成原理の持つ「外へひらく」という日本的な手法、「社稷」の特徴（特に「庶民の苦しみ、社会の矛盾に対する解放への期待」という点に対して）を現代的に再定義して地域再生の原動力に転化させること、農業と地方を尊重する理念を確立してゆくことなどが提言された。

(4) 梁漱溟と江渡狄嶺の農の思想および実践の根底にかかわる哲学的な問題を比較的に検討し、両者がともに農の実践を通して、より深いところで形而上学の根本を掴んでいたことを明確にした。

梁漱溟も狄嶺も生活と思想の統一を果たした思想家であった。前者が郷村、後者が百姓の「家稷」という現実をみずからに不可欠の課題とし、それぞれ、郷村および家稷という農の実践を通して、独自の形而上学を形成した。

梁漱溟は「理性」を根底に据えて郷村建設を試みた。「理智」と「理性」は彼の形而上学を知る重要な概念である。一方、狄嶺は「行」と「場」に基づく農の哲学を創見した。「知解（ちげ）と行解（ぎょうげ）」、「陳辞」と「陳事」などは、その形而上学的洞察にかかわるキーワードとなる。本研究では、宇宙の根本、実在と現象、真理と経験といった本源的な問いを發したこれらの概念に対する丹念な読解と対比的な吟味がなされている。

最後に結論として解き明かしたのは、梁漱溟と狄嶺の形而上学の根本を意味する「無表示」と「那事（なに）」の近似性である。

梁漱溟は「理智」の働きという「表示」を打ち消す「無表示」をもって、宇宙の根本を説こうとした。つまり、「宇宙の根本は求められるものではなく、生命の内側に流れるものである」。「それはどこまでも内側から捉えられたものであって、外にたてられものではない。すなわち、外にたてようとする理智の働きを破棄することにおいて、無私の感情としての理性において体現されるのである」。

一方、狄嶺の「那事」とは、「世界の根本的ありようを問うことばであって、世界はこうだと断定することではないし、またたんなる疑問詞でもない」。狄嶺においても、「那事は行において体現される。那事は求められるものではなく、求めるはたらきそのものを引き起こす根底である。すなわち、土の生活へ沈潜することをとおして、地より湧き出るのが体認されるのである。こうして地涌としての行において那事は百姓の内なる生命とじかにふれあう。それが『生命の道』にほかならない」。

このように、ともに農の実践という「行」を通じて「生命の流行」と「生命の道」を説く梁漱溟の「無表示」と狄嶺の「那事」に関する知見に両者の哲学

の共鳴点が認められるのである。

(5) 付記

本研究は、科学研究費助成事業の課題として中途採択されたちょうど半年後の2011年3月11日に、未曾有の複合災害「3・11 震災・原発事故」が発生した。地域協同・共生、いいかえれば、持続可能な社会を実現するためにはどうすればよいのか、何が必要なのかについて哲学、思想の次元から捉え直すことが、いっそう重要になってきたと思われる。その意味で私たちの課題は完成形を迎えたのではなく、むしろさらに開かれたものとして、今後も様々な観点からアプローチしていかなければならないと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 李彩華「梁漱溟の郷村建設理論と日本——昭和初期頃までの関わりを中心に」日本思想文化研究会編『日本思想文化研究』通巻第8号、2011年、49～68頁。査読有。
- ② 木村博「江渡狄嶺と梁漱溟——知解(ちげ)・行解(ぎょうげ)と理智・理性をめぐって」長崎総合科学大学地域科学研究所編『地域論叢』No. 27、2012年、1～6頁。査読有。

[学会発表] (計12件)

- ① 李彩華「江渡狄嶺の農の思想と晩年における国体論の問題」、名古屋哲学研究会日本思想史部会、2011年2月13日、名古屋市立大学。
- ② 李彩華「梁漱溟の郷村建設理論と日本——昭和初期頃までの関わりを中心に」、山東大学ユダヤ教と比較宗教研究センター日中共同研究会、2011年8月26日、中国山東大学。
- ③ 木村博「江渡狄嶺と梁漱溟——那事(なに)と無表示をめぐって」、山東大学ユダヤ教と比較宗教研究センター日中共同研究会、2011年8月26日、中国山東大学。
- ④ 岩崎正弥「江渡狄嶺・農本思想・地方自治」、山東大学ユダヤ教と比較宗教研究センター日中共同研究会、2011年8月26日、中国山東大学。
- ⑤ 木村博「理知と理性および知解(ちげ)と行解(ぎょうげ)をめぐって」、共同研究定例研究会、2012年1月28日、愛知大学豊橋校舎。
- ⑥ 岩崎正弥「江渡狄嶺・権藤成卿・菅原兵治」、共同研究定例研究会、2012年1月28日、愛知大学豊橋校舎。
- ⑦ 李彩華「協同・共生の視点から考える江渡狄嶺

の農業擁護思想」、共同研究定例研究会、2012年1月28日、愛知大学豊橋校舎。

- ⑧ 李彩華「安藤昌益の『農の思想』に学ぶもの」、中華日本哲学会国際シンポジウム、2011年11月24日、北京外国語大学。
- ⑨ 岩崎正弥「農の思想・環境・地域共生」、長崎総合科学大学「農業と環境」公開講演会基調講演(招待講演)、2012年11月30日、諫早商工会議所。
- ⑩ 李彩華「梁漱溟『農の思想』に学ぶ協同共生の知恵—サステイナビリティの視点から」、長崎総合科学大学「農業と環境」公開講演会コメント(招待)、2012年11月30日、諫早商工会議所。
- ⑪ 木村博「農の哲人・江渡狄嶺におけるサステイナビリティ・循環・Cut Aについて」、名古屋哲学研究会共催「宗教・農の思想とサステイナビリティ」シンポジウム、2013年2月17日、名古屋市立大学。
- ⑫ 岩崎正弥「農業(農本思想)・キリスト教・サステイナビリティ」、名古屋哲学研究会共催「宗教・農の思想とサステイナビリティ」シンポジウム、2013年2月17日、名古屋市立大学。

[図書] (計1件)

- ① 近畿大学日本文化研究所編、風媒社出版『否定と肯定の文脈』2013年、(岩崎正弥「社稷をめぐるコミュニティデザイン」、157～177頁)。

[その他]

ホームページ等。準備中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李彩華 (リ サイカ)

名古屋経済大学・経営学部・准教授

研究者番号：10310583

(2) 研究分担者

木村博 (キムラ ヒロシ)

長崎総合科学大学・人間環境学部・教授

研究者番号：20341555

岩崎正弥 (イワサキ マサヤ) (2011年度より)

愛知大学・地域政策学部・教授

研究者番号：40221791

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

牛建科 (中国山東大学・哲学と社会科学学部・教授)

李善峰 (中国山東省社会科学院・社会学研究所・教授)

王青 (中国社会科学院・哲学研究所・研究員)